
ハーブ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーブ

【Nコード】

N7443L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

アイルランドで起こる謎の連続殺人事件。その解決を依頼された本郷と役が今回戦う相手は。アイルランドを舞台とした怪奇系の作品です。

第一章

ハーブ

アイルランドの首都ダブリン。ここで今奇怪な事件が起こっていた。

アイルランドに多くあるパブだがどのパブでもこの話題でもちきりだった。

「またか」

「ああ、まただ」

「また起こったぜ」

誰もがビールを片手にひそひそと話す。その話す口ぶりはまさに事件、しかもかなり陰惨なものについて話すものだった。そしてそれはその通りであった。

今ダブリンでは連続殺人事件が起こっていた。それも立て続けにある。

「もう何人死んだんだ？」

「七人だ」

「またそれは多いな」

「そうだな」

こうひそひそと話をする。

「それで殺された奴は誰なんだ？」

「ダブリンの日雇い労働者のおっさんだよ」

「何だ？前はパブの親父だったよな」

「それで今度は労働者か」

その殺された被害者もまちまちだった。その職業はだ。

「それも殺された現場にいつもハーブの音が鳴り響くんだろ？」

「それもわからないよな」

「殺してる奴は何者なんだ？」

とにかくあらゆることが謎であった。

「ハーブを奏でてるってよ」

「それがわからないしな」

「何者なんだか」

誰もが首を傾げる話だった。それはダブリン市警でも同じであり捜査の担当を依頼された刑事達も頭を捻っていた。彼等にしてみてもだ。

「ハーブの音だけで犯人は何処にも見えない」

「じゃあ人間じゃないのか？」

「そうじゃないのか？」

「死霊か？」

刑事達は密かにこんな話もしていた。

「それが殺してるんじゃないのか？」

「それか妖精か」

「妖精か」

「少なくとも人間じゃないだろ」

結論の一つとして出て来たのだった。

「どうもな」

「じゃあ我々では事件の解決はできないのか？」

「じゃあ人を呼ぶか」

「魔術師かそういうのをな」

こうした話をしてであった。まずは二人の男が呼ばれたのだった。彼等は遠い東の国から来た。

一人は黒髪を短く刈りジャケットにジーンズという精悍な顔立ちの筋肉質の背の高い若い男である。もう一人は地味な緑のスーツにクリーム色のトレンチコートを着た薄茶色の髪を左右に分けた男だ。涼しげな顔をしておりその目には深い叡智がある。

その二人が今ダブリンのあるパブの中にいた。そのカウンターに座って二人で話をしている。飲みながら並んで座っているのだった。

その中でだ。若い男がスーツの男に声をかけてきた。二人共若い東洋人である。ジャケットの男の方が幾分若い感じである。

「美味しいですね」

「そうだな、アイルランドのビールはな」

「幾らでも飲めますね」

実際にジャケットの男はそのビールを次から次にと飲んでいる。

「こんなに味がいいとは」

「うん、確かにな」

スーツの男もその言葉に頷く。

「さて、それでですね」

「そろそろだな」

「ああ、どうも」

そしてであった。ここで二人の横に初老の男がやって来た。目の色は灰色でくすんだ金髪を角刈りにしている。かなりがっしりとした身体つきの男である。

その男が二人のところに来てだ。まずはこう尋ねてきたのだ。

「本郷忠さんと役清明さんですね」

「ええ、そうです」

「その通りです」

「ダブリン市警のアルバート・レーガン警部です」

男はこう二人に名乗ってきた。

「事件の捜査を担当しています」

「話はおおよそ聞きました」

「連続殺人事件ですね」

「はい、そうです」

まさにその通りだというのだった。そしてさらに話してきた。

第二章

「これがまたかなり奇怪な事件でして」

「そうですね。まず被害者は老若男女様々で」

今言ったのは本郷だった。ジョッキの中のビールを飲みながらさ
らに話すのだった。

「時間帯もですね」

「朝も昼も晩もです」

軽侮は被害者達が殺された時間帯についても話した。

「全くばらばらです」

「何一つとして一致しない」

今度は役が言ってきた。彼はジョッキを置いてそのうえで考える
顔になっている。そうしてそのうえで静かに話すのであった。

「被害者も時間帯も」

「事件の現場はダブリン市内です」

警部が今度話したのは事件が起こった場所についてだった。

「それ以外はです」

「それもまちまちだと」

「そうなのですね」

「その通りです。何一つとして一致しません」

警部は言いながら首を捻った。

「おかしい話です」

「そうですね。しかも」

「ハーブですか」

そしてであった。二人は今度はこのことを話に出してきた。

「事件の現場にハーブが鳴る」

「妙な話もここに極まれりです」

「はい。そして殺された者は誰もがその首を細く強靱な糸で首を締
められています」

「殺され方は同じ」

「それだけが」

「そうです。それだけです」

警部の目が話すその度に曇っていく。一致している非常に数少ないことだった。

それだけは同じだと話してだ。警部は二人に対してあらためて問うのだった。

「それで依頼ですが」

「だからここにいます」

「これが返答です」

こう言ってみせた二人だった。

「それで宜しいでしょうか」

「是非共」

「有り難うございます。ではようこそ日本から」

「はい、どうぞ」

「それでは」

こうして二人は事件の解決を依頼された。この謎の連続殺人事件にだ。

二人はすぐにダブリンのホテルに宿を借りた。そのホテルとは至って普通のホテルであり警部にしても少し目をしばたかせるものがあった。

「ホテルでしたらもつといいものを用意しますが」

「あまり気取るのも何ですから」

「ですから」

だからだという二人だった。

「御気になさらずに」

「私達はそこでもいいですから」

「左様ですか」

「はい、それでなのですが」

「私達だけではありませんね」

三人はそのホテルの前で話をしていた。夜のダブリンは至る場所でパブの中から光が出ている。それがそのまま街の灯りになっている。

その灯りに照らされた夜のアスファルトの上でだ。三人は話しているのだ。三人共ビールのせいかな顔が真っ赤になっている。

「もう一人呼ばれたとか」

「イタリアから」

「アンジェレッタⅡドラゴーナさんです」

この名前も出て来たのだった。

「その人も御呼びしています」

「合わせて三人ですか」

「私達も入れて」

「お嫌ですか？」

警部はここで二人に問うた。

「御二人だけでやられたかというのなら」

「いえ、それはありませんので」

「安心して下さい」

すぐにこう答えを返した二人だった。

「事件の解決には人が多い方がいいですから」

「それに今度の相手は」

役はここで考える顔になって述べた。

第三章

「かなり厄介な相手の様ですね」

「だからですか」

「はい、ですから」

「俺達は構いません」

本郷も答えた。これで話は決まった。そうしてであった。

警部は最後にこのことを話したのだった。

「そのアンジェレッタさんですが」

「はい」

「もう来られたのですか？」

「いえ、それはまだです」

二人にそれはまだだと答えるのだった。

「今別の事件の解決にあたっておられるそうで」

「それで、ですか」

「まだなのですね」

「はい、だからです」

それでまだ来ないというのである。

「ですから」

「わかりました。それでは」

「今は」

こうして話は終わった。二人は警部に別れを告げてからホテルの中に入った。ホテルの中は質素で頑丈な造りである。イギリスのそれと比べると垢抜けておらず地味であるが古風で趣きのある造りである。その中に入ったのである。

大きく頑丈なベッドにそれぞれ腰掛ける。本郷はそのうえで役に問うた。

「とりあえずはどうしますか？」

「これを使う」

言いながらであった。数枚の白い札を出して来たのである。

「これを出してそれでだ」

「ダブリンの中を見回りますか」

「八人も殺した相手だ」

役の言葉は強いものになっていた。

「かなりの強さだ」

「はい、そうですね」

それは本郷も感じ取っていた。その顔が険しいものになっている。

「それは」

「ハーブを鳴らす。しかし姿は見えない」

「亡霊か妖精の類ですね」

「どちらにしろ尋常な相手ではない」

だからだというのである。役は話すのだった。

「何かあればすぐにそこに向かえるようにしておく」

「それじゃあ今は」

「そうだ。こうしてダブリンの中を見回しておく」

その為の札だというのである。白い札である。

「それではだ」

「はい、それで御願います」

役がその札を投げるとだった。札達は数羽の小鳥になった。そのうえで壁や窓を通り抜けそのうえでダブリンの街中に出たのだった。それを見届けた役はだ。あらためて本郷に言ってきた。

「それではだ」

「ええ、もう寝ますか」

「シャワーを浴びてからだな」

「そうですね。ただ」

「ただ？」

「いえ、ここじゃ普通なんですけれど」

苦笑いと共の言葉だった。

「だから嫌に思う方が変なんですけれどね」

「ユニットバスか」

「俺はあれがどうも」

バスとトイレが一緒の部屋にある造りである。欧州ではそれが普通である。

「好きになれないんですよ」

「シャワーだけなら問題はないだろう」

「いえ、それでもですよ」

その苦笑いと共の言葉だった。

「慣れなくて」

「欧州に何度も来ているのにか」

「いや、それでも慣れません」

どうしてもというのだ。その言葉はぶれてはいなかった。

「本当に」

「そうか。なら入らないか」

「いや、シャワーは浴びます」

それでもだというのだ。

第四章

「好きにはなれませんが清潔にしておかないといけませんからね」
「わかった。では先に入るといい」

「ええ、それじゃあ」

「私は後から入る」

役はそうするというのだ。

「それではな」

「わかりました」

こんな話をしてからそれぞれシャワーを浴び眠りに入った。翌朝二人は起きるとまずはホテルを出た。そうしてそのうえでダブリンの古い街並みを歩いていく。

リフィ川にかかるハーフベニー橋にもたれかかりながらそこでサンドイッチを食べている。その白く緩やかなアーチの橋も青い川も美しい。だが本郷の顔は晴れず面白くなさそうな顔でそのサンドイッチを食べている。

そうしてだ。それから役に対して言うのだった。

「あのですね」

「どうした？」

「このサンドイッチですけれど」

今食べているサンドイッチを見ての話である。ダブリンのパン屋で買ったものである。中にはレタスにソーセージ、それにトマトがある。内装は日本のそれとあまり変わらない。

「何かね」

「美味しくないか」

「はつきり言って日本のものと比べるとかなり味が落ちますよね」
その不機嫌な顔での言葉だ。

「イギリスのものよりましかとは思いますが」

「アイルランドも同じだ」

「同じなんですか」

「食べ物にはあまり期待しないことだ」

こう言うのである。彼もそのサンドイッチを食べているがやはりあまり面白くなさそうな顔をしている。美味しいとは思っていないのである。

「この国の食べ物にはだ」

「だからですか」

「それはわかっていたのではないのか？」

「まあそうですけれどね」

それは彼も同じだった。

「それでもこれは」

「予想以上か」

「はい、予想以上に」

まさにそうだというのである。

「まあ食べられればいいとしますか」

「日本料理店に行くか」

「いえ、そこまではいいです」

それは断るのだった。

「別に。どうせそこもアイルランド人の舌に合うようにですよ」

「ロンドンの日本料理店よりはましな味だと思うが」

「イギリスと比べたら何処でもましですよ」

とにかくイギリス料理をけなす本郷だった。どうやら過去に忌々しい思い出があるらしい。それでこんなことを言っているようだ。

「あれはもう」

「味付けは塩と酢だけだ」

「鎌倉時代の料理じゃないんですから」

やはり酷評している。

「何で二百年の黄金時代であんな味なんですかね」

「元々農業が盛んになれない国だからだな」

「それでなんですか」

「イギリスは土地が痩せている」

しかも寒冷であり気候も悪い。土地の質はチョーク質である。それで美味しいものがある筈がないのである。とてもである。

「プディングにオートミールといったものがあるがな」

「あれもアメリカのやつの方がずっと美味しいですね」

「とにかくこの食べ物日本人の口には合わない」
役はこう話すのだった。

「諦めることだな」

「ええ、諦めてます」

実際のところ彼もそうなのだった。

「それじゃあこれを食べたら」

「捜査の開始だ」

「それで何かわかりましたか？」

「いや」

サンドイッチを食べながら首を横に振る役だった。

「今のところはだ」

「そうですか」

「まだこれからだ。だが目は放った」

あの小鳥達のことだ。それを目と表現したのである。

第五章

「すぐにわかる」

「そうですか。それじゃあ」

「見えればすぐに動く」

役の言葉が再び出された。

「それではだ」

「はい、まずは食べてからですね」

その口に合わないサンドイッチを食べてからだった。そのうえで行くのだった。

「それからですね」

「まずは食べることだ」

それからだというのである。

「何もかもそれからだ」

「ええ、それは確かに」

それはその通りだと。本郷も賛成して頷いた。

「じゃあ今から」

「食べてから捜査の開始だ」

「ですね。それで」

「それで？何だ？」

「見つかりましたか？」

今度は役にこのことを問うたのである。

「手懸かりは」

「いや」

役は本郷のその言葉には首を横に振って述べるのだった。

「それはない」

「ありませんか」

「それはない。だがわかったことはあった」

それはだというのだ。真面目な顔で語るのだった。

「一つだ」

「妖気でもですか」

「そうだ。感じた」

それをだというのだ。その真面目な顔で語っていく。

「それはだ」

「それぞれの殺害現場で、ですね」

「それは感じた。それも尋常なものではない」

「だとすると」

それを聞いてである。本郷は目を鋭くさせて次の言葉を出した。
その言葉は。

「犯人はやはり」

「人間ではない。我々の出番だ」

「はい、そうしましょう」

「罾も仕掛けておいた」

妖気を感じ取っただけではないというのである。

「罾もだ」

「それですか」

「罾というよりは耳だが」

話は少し訂正された。それはというのだ。

「耳を置いておいたのだ」

「耳で聞いたらすぐにですね」

「動くぞ」

本郷に顔を向けての言葉だった。

「それでいいな」

「わかりました。それじゃあ」

こう話をしてそのうえで橋の上での朝食を終えた。それからだった。

ダブリンのその古典的とさえ言える街の中を歩いているとであった。役がふと言ってきたのである。

「!?! 来たか」

「来ましたか」

「そうだ、来た」

こう言ったのである。そうしてだ。

「場所もわかった」

「何処ですか？」

「部屋の中だ」

そこだというのである。

「その中だ。今度は密室殺人だ」

「まさに魔物の行動ですね」

本郷は役からそれを聞いて述べた。

「そうなる」と

「ではその部屋に向かうとしよう」

「今出たんですか？じゃあ被害者は」

「まだ殺されてはいない」

それは大丈夫だという。しかしであった。

第六章

「だが。待ち伏せされている」

「待ち伏せですか」

「そうだ。すぐに向かいそれを防ぐ」

これ以上の被害者が出るということもあった。防ぐというのである。

「わかったな」

「ええ、それじゃあ」

「行くぞ」

こうしてであった。二人はその『耳』が聞いた場所に向かうのだった。そうして向かうとであった。そこはダブリンの住宅街にある五階建てのアパートだった。その四階であった。

階段を登りそうしてだった。一気に進む。その鉄の扉はだ。

「この中だ」

「はい、この中ですね」

「そうだ。妖気を感じるな」

「俺でもね」

本郷もそれをはっきりと感じ取ってきていた。それはかなりのものだった。

それを感じながらだ。彼は刀を出してきた。そうしてである。

「じゃあ」

「斬るか」

「鍵だけを。後始末は警察に御願いますか」

「そうするか」

「いえ、それには及ばないわ」

しかしであった。ここで後ろから声がしたのだった。

「斬るということはね」

「斬るということは!？」

「そうよ、それはね」

こう二人の後ろから言ってきたのである。

「そこまでしなくてもね」

「そうか、あんたが」

「もう一人の担当者か」

「遅れて御免なさい」

イタリア訛りのゲール語での言葉だった。その言葉は微笑んでい
る。波がかった黒髪に猫のそれを思わせる黒い瞳の細面の美女であ
る。赤いシャツに黄色いコートはまさにイタリアを思わせる派手な
服装であった。下は青いズボンである。

「名前はダブリン市警の方から聞いているわね」

「ああ。アンジェレッタさんだよな」

「そうよ、アンジェレッタⅡドラゴーナ」

美女は微笑んで名乗ってきたのだった。

「やっとここに来たわ」

「そうか、間に合ってくれてよかったぜ」

「それではだ」

「それだけれど」

また言ってきたアンジェレッタだった。

「鍵のことは私に任せてくれるかしら」

「あんたがか」

「ええ、それでいいかしら」

こう彼等に言ってきたのである。

「それで」

「ああ、いいぜ」

「私もだ」

本郷も役も彼女のその提案に頷いたのだった。

「どうやってそうしてくれるのかはわからないがな」

「荒事よりも穏便に済ませられるのならそれに越したことはない」
それならばというのである。役はこう述べるのだった。

「それではだ」

「わかったわ。それじゃあね」

「頼んだぜ」

「見せてあげるわ。それじゃあ」

それに従いであつた。アンジェレッタは扉の前に来た。そうしてコートの中から一個の水晶球を出してであつた。そこから光を出したのだ。

その光がドアのところにかけるとだつた。鍵が開く音がしたのだつた。

「これでいいわ」

「これでか」

「いいのだな」

「ええ、これでいいわ」

二人のその整つた顔での微笑みを見せての言葉だつた。

「中に入られるわよ」

「じゃあ今からな」

「中に入るとしよう」

「幸いまだ狙われている人は来ていないけれど」

アンジェレッタも険しい顔になってきていた。明らかに警戒する顔であつた。

「けれどこれはね」

「あんたも感じるんだな」

「若しこれで感じないというのなら」

アンジェレッタはその顔で語り続ける。

第七章

「この仕事はできないわ」

「その通りだな」

「だからよ」

そしてまた言うのだった。

「行かせてもらうわ」

「楽しいゲームのはじまりだな」

本郷はあえて軽くかつ強気に彼女に言ってみせた。

「それじゃあな」

「ええ、じゃあ」

「行くとしよう」

役が扉に手を当ててそこを開いた。三人はすぐに部屋の中に踊り込んだ。

するとであった。部屋の窓のところにそれが座っていた。それは白く透き通る様な衣を着て薄い色のブロンドの髪を長く伸ばした美女だった。その美女がアイリッシュハープを手にもって座っていた。彼女を見てだ。三人はすぐにわかった。それも全てが。

「御前か」

「わかったのね」

「すぐにわかることだ」

その美女にこう返した本郷だった。

「それだけの妖気を放っていればな」

「そういうことね」

「そういうことだ。そしてだ」

本郷の問う声が鋭いものとなる。その手には既に刀が抜かれ構えられている。

その中で彼は美女に対してさらに問うた。

「聞きたいことがある」

「何かしら」

声はソプラノであった。涼しげであり清らかでもある。まさに歌う様な感じだ。顔立ちといいまるで妖精である。だが恐ろしいまでの妖気が彼女のそれを禍々しいものに変えてもいた。

「それは」

「何故殺す？」

問うのはこのことだった。

「人を殺すのは何故だ？」

「それに理由が必要かしら」

これが返答だった。

「人を殺すのに」

「何っ!？」

「殺したいから殺す」

その涼しげな笑いと共の言葉である。

「それだけよ」

「それだけか」

「そうよ、それだけよ」

そして次の言葉は。

「妖精は行動に理由など必要としないものよ」

「必要ではないか。そうだな」

美女のその言葉に頷いたのは役だった。

「死の妖精にとってはない」

「私が誰かもわかるのね」

「それだけの妖気を放つ妖精といえばだ」

役はそこから分析したのだ。その妖気からである。

「それ以外にはない」

「だからなのね」

「理由もなくただ殺したいから殺す」

「それが私よ」

「それこそが死の妖精だからな」

「では私がここにいる理由は」

妖精はそれについては理由があると述べてきた。そうしてそのうえで話すのだった。

「わかるわね」

「充分過ぎる程ね」

今言ったのはアンジェレッタだった。

「よくわかるわ」

「そうなの。それはなの」

「人を殺すには人がいる場所にいなければならない」

これは当然のことだった。人を殺すのに人がいない場所においてはどうしようもない。貝殻を拾うのに砂浜に行かなければならないのと同じ理由である。

「だからよ」

「その通りよ。ここにいる住人を待っていたけれど」

「生憎だったな」

本郷が一步前に出て言ってみせた。

「来たのは俺達だ」

「いいことよ。殺すのが一人ではなくなったから」
顔を微笑まさせての言葉だった。

第八章

「有り難いことよ」

「有り難いというのか」

「ええ、有り難いわ」

その微笑みは清らかである。しかしそこから発せられるものは不気味なものである。笑顔とそこから発せられるものは全く別であった。

「三人。楽しみだわ」

「生憎だけれどな」

本郷は刀を構えたまま話す。

「俺もそう簡単にはだ」

「倒されないというのかしら」

「その通りだ。倒されるのは手前だ」

「そういうことだ」

次に出て来たのは役だった。

「我々は貴様を倒す」

彼はその右手を自分のコートの懐に入れていた。

「これ以上の殺人はさせるわけにはいかない」

「死の妖精である私に殺すことを止めさせるのね」

「そうよ」

アンジェレッタも言ってきた。

「貴女にとっては不本意でしょうけれど」

「生憎だけれど私はやられないわ」

美女はハープを手にしたままさらに言ってきた。

「残念なのはそちらよ」

「私達だというのね」

「私にとって人は」

その言葉は。

「殺すものなのだから」

「つまりあれだな」

本郷は今の美女の言葉を聞いて述べた。

「俺達は手前にとっては食い物みたいなものなんだな」

「私は何も食べる必要はないけれどね」

「そうだな。ステーキみたいなものだな」

本郷はこう返した。

「そういうことだな」

「おかしい例えだけれどそうなるわね」

美女も笑ってそれは否定しなかった。本郷の今の言葉はだ。

「食べるわけではないにしても」

「ただしな」

だがここで彼は言った。

「牛は人を殺すことができるってのを忘れるな」

「食べられる存在でもなのね」

「そして俺達は牛じゃねえ」

今度はこのことも否定したのだった。

「ライオンに思んだな」

「あら、大きく出たわね」

「ライオンは食われはしねえ」

刀を構えたままの言葉だった。

「それは言っておくからな」

「話は聞いたわ」

ただし聞いただけである。

「それじゃあ」

「行くぜ」

「本郷君」

役は本郷の右隣にいた。そこから彼に対して言ってきたのである。

「いいな」

「ええ、俺が突っ込みます」

「頼んだぞ。この相手はかなりの手強さだ」

「俺はまずは」

本郷はここで刀以外のものも出してきた。その手に手裏剣を見せ
ている。

その苦無型のそれを数本右手に持ちながらだ。彼は今度はアンジ
エレッタに対して言ってきたのだった。

「それでアンジェレッタさんだったよな」

「はい」

「あんたの術は何なんだ？」

「私はこれです」

既にその左手に水晶球が浮かんでいる。

「これを使います」

「そうか。それだったらな」

「貴方が前に出られて」

「後ろは頼むな」

前にいる美女を見たままの言葉だった。

「そっちはな」

「はい、それでは」

「じゃあそういうことだ」

美女に対しての言葉に戻った。

第九章

「手前を倒させてもらうぜ」

「そうだな。来い」

こうして戦いに入る。まずは。

本郷が動いた。その手裏剣を右手を左から右に動かして投げた。

数本の手裏剣が一直線に飛び美女に襲い掛かる。しかし美女は身動き一つしない。

ただそのハープから数本の糸が出た。そして。

その手裏剣をそれぞれ貫いた。糸で貫いたのだ。

するとその手裏剣は全て壊されてしまった。まるで氷が割れる様
にだ。

「何っ、退魔の文字が書いてある手裏剣をかよ」

「あら、そうだったのね」

美女はそれを聞いても涼しい顔であった。

「それは気付かなかったわ」

「随分と余裕な言葉だな」

「その程度ではね」

清らかなそれでいて妖気に満ちた笑みはそのままだった。

「何ともないわ」

「へっ、こいつはどうやら」

「手強いな」

役は懷から銃を出し構えながら述べた。

「それもかなりだ」

「そうですね。どうですか役さん」

「何だ？」

「その銃弾は効きますか？」

横目で彼を見つつ笑いながらの言葉だった。

「それは」

「今から確かめる」

これが今の彼の返答だった。

「それでいいな」

「ええ、御願います」

「それではだ」

こうしてであった。銃を放つ。そこから銀の銃弾が放たれた。

しかしそれでもであった。美女の前で止まりそれから。忽ちのうちに碎け散った。銀がまるで氷の如く碎け散りそのうえで消え去ったのだった。

「銀の弾丸もか」

「この通りよ」

美女の笑みは変わらない。

「どうかしら、これで」

「強いな」

役も素直に賞賛の言葉を口にした。

「これはまた」

「認めるのね、貴方も」

「相手の実力を見極める」

彼は妖精に应えて静かに述べた。

「それもまた戦いの一つだ」

「それはわかつているのね」

「貴様の武器はそのハープの糸」

先程本郷の手裏剣を碎いたそれだ。

「そして結界もか」

「つまり私は剣と盾を持っているのよ」

「それはわかった」

それを受けての言葉だ。

「だが」

「だが？」

「だからといって倒されるつもりはない」

美女は見据え続けている。

「それは言っておこう」

「あら、ではこのまま」

「倒す」

役の言葉は今度は一言だった。

「いいな、それで」

「わかったわ。その言葉は受けたわ」

笑みは消えない。余裕を露わにさえさせている。

「それはね」

「そうか。それならだ」

「来るといいわ」

誘いの言葉も出してきた。

「相手をしてあげるわ」

「それじゃあ」

今度出て来たのはアンジェレッタだった。彼女はゆっくりと二人の横に来た。

そうしてであった。その水晶から光を出した。その光の剣を美女に対して一直線に向ける。

それで貫こうとする。しかしだった。

第十章

その光も消されてしまった。全く効きはしなかった。

「私の光もまた」

「生憎だったわね」

美女は驚きの表情を見せる彼女にも言ってみせてきた。

「私の結界は武器だけを防ぐものではないのよ」

「魔術もまた」

「そうよ。覚えておくことね」

その言葉と共にであった。彼女のハープから糸が出て来た。そしてそれが三人を貫こうとする。

しかしそれは三人共かわすことができた。それぞれ跳びかわした。

「今のはかわせるのね」

「かわしていなければ命がなかったわね」

アンジェレッタはにこりともせず彼女に言葉を返した。

「そうね」

「ええ。私の糸はただの糸ではないわ」

美女はここで言うのだった。

「その首に巻きつき生気まで吸い取る」

「そうして命を奪う」

「それが私の糸」

こう話すのだった。

「覚えておくといいわ」

「話はわかったぜ」

本郷は美女の話を聞いて述べた。

「大体な」

「それではどうするのかしら」

「言ったな。倒すんだよ」

攻撃を碎かれてもだった。彼は強気の態度を崩さなかった。その

うえでの言葉だった。

「手前をな」

「攻撃が効かないというのになのね」

「ああ、それは心配するな」

強気の言葉は目にも出ていた。光が強い。

「手前の心配することじゃないからな」

「だからなのね」

「そうさ。気にするな」

こう言うのである。

「それで俺はな」

「どうするつもりかしら、それで」

「来な」

笑みを浮かべながらの言葉だった。

「その糸をな」

「死にたいのかしら」

「面白いものを見せてやるんだよ」

「面白いもの？」

「そうさ。それを今から見せてやるからな」

言葉はそのまま出される。

「だから今から。来いよ」

「わかったわ。それじゃあ」

美女は彼のその言葉を受けてであった。またハーブから糸を出した。

それにより今度は本郷だけを貫こうとする。しかしであった。

本郷の目が鋭くなった。そして居合いの要領でその糸を切った。

何と糸を横から一閃し真っ二つにしてみせたのである。

「うっ……」

するとだった。不意に美女が苦悶の声をあげた。

その美しい顔を歪ませている。そのうえで言うのだった。

「まさか、糸を」

「こういう芸は知らなかったみたいだな」

糸を切った本郷は得意げな顔で述べてみせた。

「糸だってな、技さえあれば切れるんだな」

「糸もまた」

「そうさ」

まさにそうだというのだ。

「これはわからなかったみたいだな」

「ええ、それはね」

美女の顔は苦しげである。そして役はそれを見ていた。だが今は何も語らなかった。

そして美女はだ。表情を元に戻したうえでまた言ってきた。

言葉も元に戻している。そうして言うのであった。

「どうやら私もね」

「何だ？」

「本気になる必要があるわね」

こう言ってきたのである。

「ここはね」

「本気か」

「それをだというのね」

「ええ、そうよ」

こう役とアンジェレッタに対しても告げた。

「その通りよ」

「ならばその本気をだ」

役は鋭い言葉で述べてみせた。

第十一章

「見せてもらう」

「行くわよ」

その言葉と共にであった。ハープを奏でてきた。するとであった。不意に部屋の中が霧に包まれた。白いその霧が部屋の中に満ちた。そしてその中にありとあらゆるものが隠れてしまったのである。

「消えた!？」

「いえ、隠れたのね」

本郷に対してアンジェレッタが言ってきた。彼等もお互いの姿が見えなくなってしまうている。

「そうなのね。こうして姿を見えなくして」

「仕掛けて来るってわけかよ」

「その通りよ」

美女の声だけがしてきた。

「それでわかったわね」

「話はな」

本郷はその声に応じて述べた。

「わかってやるぜ」

「そう、わかってくれたらいいわ」

「それで死ねっていうんだな」

「命は貰うわ」

霧の中の声だった。

「それはね」

「嫌だっと思ったらどうするんだ?」

ここでは軽い言葉を出す本郷だった。

「その場合は」

「簡単よ。断ることは認めないわ」

すると美女の返答はこれであった。

「それはね」

「ほお、随分と強権的だなそりゃ」

「私は人間ではないのよ」

その本郷の今の言葉に対する返答はこれだった。

「それも当然よ」

「やっぱり強気だな。何はともあれだ」

「戦うのね」

「交渉できる状況ではない」

役が述べた。

「もっとも最初からそれは考えていなかった」

「わかっていたのね」

「その通りだ。それではだ」

「来るのね」

「仕事だ。やらせてもらう」

「そういうことね。それにしても」

今言ったのはアンジェレッタだった。

「これはかなりね」

「深い霧だな、全くな」

本郷はたまりかねた口調をあえて出してみせた。

「何もかもが見えなくなってきたな」

「そうよ。何もかもね」

そしてそれと共にであった。来たのだ。

糸であった。あの糸が来た。三人がそれに気付いたのはすんでのところだった。

危ういところかわすことができた。まさに紙一重だった。本郷は身体を左に捻ってそのうえでかわしたのだ。

「危ないところだったぜ」

「かわしたのね。見えないのに」

「見えはしないさ」

それは彼も認めたのだった。

「しかな」

「かし？」

「気配は感じたからな」

「それでかわせたっていうのね」

「そうさ。かわせたんだよ」

まさにそうだという。何とかだった。

「危ないところだったけれどな」

「そうね。糸が少なければね」

美女の声は相変わらず霧の中から聞こえているだけだった。

「かわせるわね。けれど」

「多ければか」

「そしてよ」

声だけが聞こえてくる。だがその声には明らかに殺意がこもっていた。その殺意を楽しんでいる声でそのうえで三人に対して言っているのだった。

「こうすれば」

「来たか」

役が言った。そうしてだった。

第十二章

今度は横から、そして上からだった。複数の方向から三人に対して襲い掛かって来たのだった。それで彼等を殺そうというのである。今度はだ。アンジェレッタがその光で咄嗟に結界を張った。それによってその複数の糸を防いでみせたのである。だがその光をもつてしてもだ。

霧の向こうは見えない。全くだった。

「どんな光でも見えないのね」

「唯の霧じゃないのはわかってたけれどな」

本郷がアンジェレッタのその言葉に応える。

「やっぱりそうか」

「熱で蒸発させられるかしら」

「いや、無理だな」

それは無理だというのだった。今言ったのは役である。

「これは」

「無理なのね」

「魔力の霧だ。熱で消えるものではない」

「いい洞察ね。その通りよ」

そして美女も言ってきたのだった。

「そういうことよ。熱でも何でもこの霧は晴れないわ」

「みたいだな。忌々しい話だぜ」

「しかしだ」

だが、であった。ここで役は右手から札を出してきた。赤い数枚の札だった。

それを出してだ。彼はその札を前に放った。札達は忽ちのうちに赤い小鳥になりだった。

それがハープの音がする方に向かってだった。そしてであった。霧が晴れた。まさに一瞬だった。

「!?!霧が」

「晴れた!?!」

本郷とアンジェレッタはそれを見て同時に述べたのだった。

そしてだ。美女の結界が小鳥達を弾いた。赤い小鳥達はそのまま消え去った。役はその状況を一部始終見ているのだった。

「そうか」

「残念だったわね」

霧を消し再び姿を現わした美女は微笑みをたたえたまま言ってきた。

「今のは失敗だったわね」

「失敗か。確かに」

「さて、これでいいわ」

「いいとは何だ?」

「今日はこれで帰らせてもらうわ」

こう言っただけであった。その姿を次第に消していたのだった。

「これでね」

「逃げるってんだな」

「帰るだけよ」

今のは本郷に返した言葉だった。

「それだけなのよ」

「それだけなの」

「そうよ、それだけよ」

その言葉のやり取りの間にも姿を消していく。ハープもまた次第に透き通っていくのだった。その中での言葉であった。アンジェレッタに述べた言葉だった。

「それじゃあ」

「今度だぜ」

本郷が強い言葉で彼女に言ってきた。

「わかったな」

「そちらもこのつもりよ」

美女からの言葉だった。

「それはね」

「そうか。今度の交渉は決まりだな」

本郷は今の彼の言葉に笑いながら述べてきた。

「じゃあ次だな」

「次ね」

「そうだ。次だ」

本郷はまた言った。

「次に会ったその時が手前の命日だからな」

「話は聞いたわ。それじゃあ」

「ああ、覚えておくようにな」

そんなやり取りの後で姿を消す美女だった。後に残った三人はとりあえずは姿を消した。そうしてそのうえで部屋を元に戻し鍵を閉めなおして部屋の住人に気付かれないようにしてであった。そうして警部に連絡して会うのであった。

警部はまずアンジェレッタを見てである。まずは彼女に対して言った。

「意外と早いですね」

「私が来たことがなのね」

「はい、正直驚いています」

まさにそうだというのである。

「お仕事は早く終わったのですね」

「終わらせました」

これがアンジェレッタの返答だった。

第十三章

「それで来ました」

「終わらせたいのですか」

「仕事は終わらせるものです」

静かに述べたアンジェレッタだった。

「そういうものです」

「そうですか」

「はい、ですから」

また言ってであった。そしてである。今度はアンジェレッタから話すのだった。

「ここに来ました」

「成程。仕事は終わらせるものですか」

「それが私の考えですから」

「わかりました。では御到着を歓迎します」

そうしてであった。あらためて話すのだった。今度は事件の話だ。

「そしてですが。犯人を見たのですね」

「はい、しっかりと」

本郷が話してきた。

「それどころか一戦交えてきましたよ」

「そうですか。一戦ですか」

「はい、倒すことはできませんでしたがね」

「ですが相手がわかったのは大きいですね」

警部はこのことは素直に喜んでいた。一応満足な顔をしている。

「それは」

「大きいですか」

「はい、大きいです」

こう本郷にも述べるのだった。

「人間ではなかったですか。やはり」

「完全に俺達の仕事ですね」

「警察が相手をするのは人間です」

「警部は人間の世界だけで出される言葉を述べた。」

「ですから」

「そういうことですね」

「はい、その通りです。ただ」

「ただ？」

「相手を人間として話をまとめることはできます」

それはできるというのだ。厳しいその顔を微かに綻ばせての言葉だ。愛想のない警察署の一室だがそれでもその中でそんな顔をしてみせたのだ。

「そちらはお任せ下さい」

「それが警察の仕事ですか」

「こうした事件での」

犯人が人間でない場合のだというのだ。

「ですからそちらはお任せ下さい」

「御願います」

彼は真面目な顔で警部に告げた。

「そちらは」

「はい、わかりました」

「そしてです」

さらに話す彼だった。

「次で決めます」

「次ですか」

「向こうからの誘いでもありました」

美女の言葉をここで出すのだった。

「ですから」

「倒すですね」

「お任せ下さい」

彼はその言葉をさらに続けていく。

「全て」

「はい、それでは」

警部も彼のその言葉を受けて頷いたのだった。

「そちらはお任せします」

「じゃあ話はこれで決まりですね」

本郷が笑いながら話す。

「後は」

「お食事はまだですか？」

警部からの言葉だった。

「食事は」

「ああ、それですか」

本郷は警部の言葉に少し困った顔になりそのうえで述べた。その言葉は。

「それですけれどね」

「どうされますか？」

「自分達で食べますので」

そうするというのである。

「お気遣いなく」

「まさかと思いますが」

警部は察した様な顔になって三人に言うのであった。

「本郷さんと役さんは日本の方ですね」

「はい」

「その通りです」

これはもう言うまでもないことだった。

第十四章

「ですがそれは」

「何か」

「そしてです」

警部は今は二人の質問に答えずにそのうえで今度はアンジェレッタについて話すのだった。

「アンジェレッタさんはイタリアですね」

「ええ」

アンジェレッタもそれに応えて頷いた。

「そうですか」

「日本もイタリアも食べ物には定評があります」

そのことを話してきたのである。

「ですが我が国はです」

「そうではないと」

「そう仰りたいのですね」

「流石にイギリスよりはましです」

ここでイギリスを話に出して来るのが如何にもアイルランド人だった。アイルランドはイギリスに八百年もの間苛烈な支配を受けてきた。その最たるものがクロムウェルのアイルランド植民地法であり十九世紀のジャガイモ飢饉である。とりわけジャガイモ飢饉では百万もの餓死者を出してしまった。そうした経緯からアイルランドはイギリスという国を深く怨んでいるのである。それを警部も出してきたのである。

「あの国の食べ物はありません」

「そこまでだということです」

「御存知ですよね」

本郷に対してあらためて問うてきた。

「それは」

「はい。イギリスでも仕事をしたことがありますから」
「ではわかりですね」

「日本であの味で出したらかえって繁盛しますよ」
何と潰れるというのではないのだ。

「あまりものまずさで怖いもの見たさというやつで」

「日本人は変わってますね」

今の言葉を聞いた警部の偽らざる感情である。

「まずいものが繁盛するのですか」

「あまりにもまずいとかえって人気が出ます」

本郷は笑いながらそうした事情を話すのだった。

「それだと」

「その怖いもの見たさですね」

「はい。アイルランドではそれはありませんか？」

「少なくともイギリス料理についてはありません」

ここでイギリス嫌いを見せる警部だった。

「イギリス料理を食べるとアイルランドではアイルランド自体に喧嘩を売っていると認識されますのでそのことは御注意下さい」

「そこまでなのですか」

「はい。ですから」

ここまで話してであった。

「御注意を」

「わかりました。それではです」

「はい。それでなのですが」

あらためて三人に言ってきた。

「アイルランド料理は宜しいでしょうか」

「寿司を食いに行こうと思っていたのですが」

「私です」

本郷に役、二人共であった。

「寿司を食べたくなりましたので」

「ですから」

「寿司ですか」

警部は寿司と聞いて今度は微妙な顔になった。

「それはどうも」

「お嫌いですか、寿司は」

「生の魚は」

こう言うのである。

「どうもです」

「そうですか。だからですか」

「はい、それに高いですし」

経済的な理由もあるのだという。

「アイルランドではかなりの御馳走です」

「素材がないからです」

「この辺りでは日本人が食べる魚はかなり少ないですし」

警部は今度は残念そうに述べた。

「あるのは鱈に鮭位です」

「ですね。いや、俺はですね」

本郷は戸惑いながら話していく。

第十五章

「イギリスでその鰯や鮭だけなのを見てびっくりしましたから。味も殆どなかったですし」

「イギリス人は味付けを知りません」

「醤油とかないんですね」

「イギリスですよ」

今の警部の返答はかなり無茶なものである。

「そんなものがあるとでも」

「そういうことですか」

「はい、そういうことです」

「ではやはり」

「わざわざ輸入しないといけないのでかなり高いのです」
そうした事情からだったのだ。

「ですから」

「食べられませんか」

「はい、そうした面でも」

「そうですか。そういうことですか」

「そしてアンジェレッタさんは」

警部は今度はアンジェレッタに対して問うた。

「何を」

「特に考えていませんが」

彼女はこう答えたのだった。

「ですがそれは」

「それは？」

「イタリア料理を考えています」

それをだというのだ。

「いいレストランがあると聞いていますので」

「ではそちらにですか」

「いけませんか？」

「正直残念なところです」

表情は変えないがこれが警部の本音だった。

「アイルランド料理を召し上がって頂けないとは」

「左様ですか」

「あのですね。アイルランド料理は決して派手ではありません」
それは前置きするのだった。

「ですが家庭の味です」

「家庭の味ですか」

「ではそれを」

「召し上がって下さい。決して後悔はさせません」

その言葉はかなり強いものだった。

「ですから」

「わかりました」

それに頷いたのは役だった。

「では。そのアイルランド料理をです」

「召し上がって頂けますね」

「そうさせてもらいます」

こう答えた彼だった。

「お言葉に甘えまして」

「それでは俺も」

そして本郷も頷くのだった。

「そうさせてもらいます」

「ではアンジェレッタさんは」

「そうですね。私も」

「貴女もなのですね」

「正直なところ楽しそうに思えてきました」

その美貌の顔に微笑を浮かべての言葉である。

「ですから。御願います」

「はい、それでは」

「ではそういうことで」

こうしてだった。三人は警部にある店に案内された。そこはダブルリンの片隅にあるこじんまりとした店だった。その内装もシンプルであり店の客もまばらではある。家族でやっているようなそんな店だった。

その店に入ってである。警部はまず三人に対して声をかけてきた。

「ここです」

「このお店ですか」

「ここが」

「はい、アイルランド料理のお店です」

こう三人に話すのだった。

「ここで宜しいですね」

「ここまで来て断る選択肢はありませんからね」

本郷は楽しげに笑ってこう述べたのだった。

第十六章

「ですから」

「ではそれで宜しいのですね」

「ビールはありますか？」

「勿論」

またその厳しい顔を綻ばせてきた。その対比が実に愛嬌あるものにも見えるから不思議なものである。その顔で話してきているのである。

「ここはアイルランドですから」

「ではそれでなのですね」

「はい、それでは」

こう述べてであつた。そうして。

四人の席に座つてそのうえでだ。テーブルに來た中年の太った女に声をかけるのだった。

「おかみ、それでだ」

「はい、それで何だい？」

「適当に美味しいものを頼むな」

「ちよつと待つんだよ」

しかしここでおかみは言うのだった。

「うちの店はね」

「何でも美味いんだな」

「そうだよ」

むっとした顔を作つての言葉だった。

「その通りだよ」

「じゃあその美味しいものをどんどん持つて来てくれ」

「こっちのお勧めメニューでいいんだね」

「ああ、しいよ」

まさにそれでいいというのである。

「それだな」

「少し待っておきな。早速持って来るからね」

「とりあえずビールな」

「わかってるよ」

おかみは笑いながら彼に応えた。

「それは欠かせないわよね」

「まずはそれだよ」

警部は気さくに笑って話をしていた。

「それからだからな」

「アイルランドではね」

「ああ、やっぱりビールだよ」

イギリスでもこれは同じでそれこそ朝には朝食代わりに飲まれていたりする。飲むパンとさえ呼ばれている。しかしそれはあえて言わないのはやはりアイルランドだからだった。

「それを飲んでからな」

「はいよ。じゃあね」

こうしてまずはビールが運ばれてきた。四人でそれを飲んでジョッキを一杯空けたところでその食事が運ばれてきたのであった。

「あつ、来ましたね」

「へえ、これがですか」

本郷はそのアイルランド料理を見て声をあげた。

「アイルランド料理ですか」

「どうでしょうか」

微笑んでその彼に問う警部だった。

「これは」

「そうですね」

本郷はスモークサーモンにジャガイモを煮たもの、それとビーフシチューを見た。その他にはフィッシュアンドチップスやスコーンもある。そうしたものが運ばれて来たのである。

「感想を言っていないですよね」

「是非共」

これが警部の返答だった。

「御願います」

「家庭料理って感じがしますね」

こう述べるのだった。

「まさに」

「ははは、そう仰ると思っていました」

「そうなのですか」

「尚このシチューはです」

警部はそのシチューのスプーンを手に取りながら話す。

「アイリッシュシチューといいます」

「アイリッシュの」

「特徴はじっくりと煮込むことです」

そうだというのである。

「ですから肉もとても柔らかいです」

「成程」

「そしてです」

彼の説明は続く。

第十七章

「味ですが」

「どうなのですか？」

「これまたいいものですね」

「明るい笑顔での言葉だった。」

「是非共です」

「はい、それでは」

「私も」

本郷だけでなく役もそのシチュウのスプーンを手にとった。無論アンジェレッタでもある。そうしてそのシチュウを食べてみると。

「確かに」

「これは」

「見事です」

思わず三人のそれぞれの母国語が出てしまった。

「しっかりとした味ですね」

「肉も野菜もよく煮られています」

「味がよく出ています」

「それがこの店なのです」

警部はさらに上機嫌に話した。その顔はビールのせいでもう少しばかり赤くなってきた。

「家庭の味を实によく再現しています」

「そうですね。これは」

「その通りです」

本郷だけでなく他の二人も微笑んで頷いていた。

「じゃあこのスモークサーモンとかもですね」

「はい、本物のアイルランド料理です」

警部はさらに話した。

「家庭の味です」

「アイルランドは家庭の味を大事にするのですね」

「まあそれには実情もありまして」

アンジェレッタへ返した言葉だった。

「何しろ我が国は元々貧しい国でした」

「だからのですか」

「昔は麦も食べられませんでした」

ここで暗く忌々しげなものを思い出す顔になる警部だった。

「イギリスに召し上げられていましたから」

「ジャガイモ飢饉ですね」

「その時は千万はいました」

警部は語るうちに暗鬱な顔になっていた。

「それがです。飢饉でどれだけになったかということ」

「半分でしたね」

「はい、それだけです」

そこまで減ったのである。

「恐ろしい話だと思いますか？」

「普通では考えられるものではありませんね」

今度はそのジャガイモを煮たものを食べながら応える役だった。

「そこまで減るといふのは」

「百万が死にました」

まずは餓死者から話すのだった。

「ジャガイモが採れなくなってます」

「百万も餓死者が出たんですか!？」

本郷も話を聞いて啞然となっていた。

「あの、救済策は」

「イギリスですよ」

警部の言葉は今度は敵愾心が剥き出しになっていた。

「そんなことをするとでも」

「といいますと」

「麦は採れていました」

要するに食べ物はあるというのだ。

「しかしです。奴等はその麦を全て年貢として召し上げたのです」

「つまり一切の救済策を採らなかったのですね」

「それどころかアイルランドは人口が多過ぎるから減ればいいと要するに死ねということである。」

「こう言ってくれました」

「そんなことがあったんですか」

「その結果です」

彼はまた言った。

「我が国の人口は今に至るのです」

「減ってそのまま戻っていないのですね」

「餓死者も多く出ましたし」

警部は俯いていた。そして暗い顔になって述べていた。

「それ以上に多くの人間がアメリカに渡りました」

「アイルランド系アメリカ人ですね」

役がここで言ってきた。

第十八章

「ケネディやニクソンの様な」

「そしてレーガンやクリントンもですね」

警部も応える。どれもアメリカの歴代大統領である。

「他にも多くいますよ」

「そうですね。名前でわかりますし」

マックやオーといったものが姓の先についているならそれがケルト系の証明になる。スコットランドに自分のルーツがあると誇らしげに自伝に書いているマッカーサーもまたケルト系である。正式に発音すると『マックアーサー』になるのである。

「それは」

「今ではアメリカにいるアイルランド系の方が母国より多いかも知れません」

警部はこうも話した。

「我が国はあれ以来増えないままです」

「過酷ですね」

それを聞いているアンジェレッタも言葉がなかった。

「それはまた」

「イギリスはそうした国です」

警部は断言さえた。

「我々にとつてはまさに不倶戴天の敵です」

「戦争しなくてもですか」

「そうです。戦争をしなくてもです」

それでもだというのだ。

「御二人は日本人でしたね」

「はい」

「そうですが」

今更言うまでもない話だったがそれでも応える二人だった。

「それが今何か」

「あるのでしょうか」

「ありますよ」

警部は話しながらスモークサーモンを食べそれと一緒にビールも飲む。ビールはお代わりしたものを実に美味そうに飲んでいるのだった。

「これがね」

「我々は別に」

「そこまでの仕打ちを受けたことが」

「ああ、そうですね」

二人はわからなかったがアンジェレッタは察した様だった。納得した顔になりしきりに頷く。そうしながら彼女もそのジャガイモを食べている。

「日本は言われている立場です」

「韓国という国があるじゃないですか」

「警部はその国を話に出してきたのだ。」

「あの国が」

「ああ、あの国ですか」

「それでわかりました」

日本人の二人もここでやっとわかった。

「あの国はですね」

「まあ何といえますか」

「あの統治なぞまさに慈愛そのものです」

「警部は言う。」

「我々の先祖が受けた仕打ちに比べれば」

「そこまでだということです」

「つまりは」

「若しあの時韓国でジャガイモ飢饉の様なことが起こればです」

「警部はそうになっていたらと仮定して話すのだった。」

「どうなるかです」

「普通に大規模な救済処置かと」

「間違いなく」

二人もまた述べた。

「それこそ義士も何処からともなく出て来て」

「米を配るかと」

「イギリスはそんなことは一切しません」

まさに悪魔を語る言葉だった。

「そしてです」

「それだけのことが起こったと」

「そうなのですね」

「はい、これが歴史です」

アイルランドの歴史だというのだ。

「今は私達は独立してです」

「そしてですね」

「ジャガイモも食べられると」

「そうなのですね」

「その通りです。それが今です」

こう話しながら今度はジャガイモを食べる警部だった。

第十九章

「勿論パンも食べられますし」

「それだけはいいと」

「そういうことですか」

「ジャガイモもパンも私達にとっては忘れられない食べ物です」

テーブルの上にはパンもある。それを見ながらいとしげに語っていた。

「何しろ。歴史があるのですから」

「そういう事情があるとなると」

「一層味わいがありますね」

「確かに」

二人だけでなくアンジェレッタも述べた。

「そういうことですか」

「まあ暗い話になりましたが」

警部は今度は申し訳なさそうな顔になっていた。表情はころころ変わる。そのうえで話をしていくのだった。厳しい顔だが表情は豊かであった。

「どうぞ。料理をお楽しみ下さい」

「はい、それでは」

「あらためて」

四人はその夜はその素朴な歴史ある御馳走を食べた。そのうえでそれぞれの寢床に帰った。翌朝起きてからシャワーを浴びてホテルを出た本郷と役はだ。ダブリンの石畳の道の上を歩いている。彼等の左右にはもうストリートミュージシャン達がギターを手にして歌を歌っている。

二人はその中を歩きながらだ。昨夜の警部の話を思い出していた。

「アイルランドの歴史ですか」

「そしてイギリスの歴史でもあるな」

「それはそんなに昔の話じゃないんですね」

「十九世紀半ばだ」

その頃の話だというのだ。

「その時に起こったことだ」

「アメリカって国が話に出て近いとは思いましたがね」

「実際に近かったな」

「はい」

役のその言葉に応えて頷いた。

「その通りでした」

「この国も苦勞してきた」

「それもかなりの」

「苦勞をしてきていない国はない」

これは事実である。そのイギリスにしてもかなりの苦難も経てきているのだ。

「そういうことだ」

「それでもこの国はとりわけみたいです」

「それは否定できないな。それでだが」

「ええ。朝飯は」

「そのジャガイモにしよう」

それはどうかというのである。

「ジャガイモにだ。しようか」

「そうですか。ジャガイモですか」

「そうだ。それにする」

あらためて本郷に言うのだった。

「それを食べてからアンジェレッタさんに連絡しよう」

「ええ、これで」

本郷は微笑みながら自分の懷から携帯を出してみせて語った。

「そうしますか」

「さて、時間だが」

「相手は教えてくれますかね」

「結界は張ったままだ」

役はまたこのことを話した。

「それならだ」

「そうですか。それならですね」

「それが感じ取られた時に行く」

また言葉を出した。

「それでいいな」

「はい、それでは」

こう話をしたうえで屋台でジャガイモを買いそれを食べた。それから携帯でアンジェレッタと連絡を取り警部も交えて打ち合わせをした。そして夜だった。

場所は円柱が玄関に立ち並ぶ白い壮重な三階建ての建物だった。何処か神話の趣を感じさせる建物であり玄関の窓際のところには石柱に身体をくくりつけ今死のうとしている若者のブロンズ像がある。アンジェレッタはその像を見て述べた。

「クllホリンですね」

「そうですね」

役が彼女の言葉に応えた。

「アイルランドの英雄ですね」

「ケルト神話最大の英雄にして」

二人はこう話すのだった。彼等は今その像の真下にいるのである。「その彼が見守る場所です」

「戦いの場所には相応しいと言えるでしょう」

周りには誰もいない。しんと静まり返っている。空は青くそこに黄色い月が浮かんでいる。満月であり朧なその黄色い光を放っていた。

「ここは」

「そうですね。そして」

「来ましたよ」

今言ったのは本郷だった。丁度ハープの音が聞こえてきたのだ。

第二十章

そして三人の目の前に霧が起こりだ。それが消えた時彼女がいた。

「こんばんは」

「ああ、こんばんは」

本郷が彼女の挨拶に応えた。

「残念だが元氣そうだな」

「残念なの」

「戦えるのは嬉しいがな」

こうも言うがであった。

「敵が元氣で素直に喜ぶ様な人間じゃないんでな」

「了見が狭いとでもいうのかしら」

「そこまでお人よしじゃないってことさ」

そうだというのである。

「生憎な」

「そうなの」

「そうさ、それじゃあな」

「早速はじめようかしら」

「容赦はしない」

本郷は刀を抜いてきた。それを中段に構える。

役も拳銃を出しアンジェレッタも水晶を出していた。既に戦闘態勢であった。

「ここで決着をつける」

「覚悟はいいわね」

「望むところよ」

お互いに言葉を交えさせてであった。遂に最後の戦いの幕が開けた。

まずは美女が糸を出してきた。それがそれぞれ上下左右から三人を襲う。

「おいおい、今度は立体かよ」

本郷がその糸が迫るのを見ながら言う。

「まるで蜘蛛の糸だな」

「本郷君」

しかしここで役は言うのだった。

「斬るといい」

「斬るんですか」

「そうだ、斬るのだ」

そうしろというのである。

「糸をだ」

「わかりました。それじゃあ」

「それでは私も」

アンジェレッタも言うのだった。

「この糸を」

「そうして下さい、ここは」

役も銃を左手に持ち替えてそのうえで右手に燃え盛る炎の剣を出した。そうしてであった。

その糸を三人共断ち切る。アンジェレッタは水晶球から光を出しそれで焼き切っていた。

するとだった。不意に美女が辛い顔をして呟くのだった。

「くっ……」

「わかっていた」

役は彼女が苦しむのを見て述べた。

「貴様のことはだ」

「わかっていた？何を」

「貴様の糸は貴様の身体の一部だ」

そうだというのである。

「だからだ。こうして斬られればだ」

「それをどうして」

「先の戦いにおいてだ」

あのアパートの一室での戦いの時を語るのであった。

「本郷君に糸を斬られてそれで苦悶の声をあげていたな」

「それに気付いたというのね」

「戦いは何によって決まるか」

役はこのことを話してきた。

「それはだ」

「何だというのかしら」

「敵の弱点を見抜くことだ」

それだというのである。

「それによって勝つものだ」

「確かにね」

美女もそれは否定しなかった。

「その通りよ。ただ」

「ただ。何だ？」

「私は糸だけではないのよ」

こう言って微笑みを取り戻してきた。そうしてであった。

その周りに何かを出してきた。それは。

黒い無数の蝶達だった。それが夜の世界の中に出て来たのである。

第二十一章

その蝶達を周りに舞わせながら。彼女はまた言ってきた。

「これは私の僕達よ」

「死の蝶だというのね」

「ええ」

アンジェレッタの問いに微笑んで述べた。

「そういうことよ」

「触れれば死ぬ」

アンジェレッタはまた言った。

「そういう類ね」

「察しがいいわね。そうよ」

まさにその通りだというのだ。

「この蝶達は幾ら攻撃しても私は傷つかない」

「僕だからね」

「さあ、僕達よ」

悠然としてその蝶達に告げていた。

「死の世界に誘うのよ」

その言葉と共にハープを奏でる。そうして全てを霧で覆ってしまった。その中に消えた美女と蝶達を見てだ。まずは本郷が言うのだった。

「向こうにとっちゃ切り札ですかね」

「そうだな」

役も彼のその言葉に応える。

「まさにそれだ」

「つまりピンチってことですね」

「いや」

しかしであった。ここで彼は言うのだった。

「そうではない」

「といますと？」

「ハープの音は聴こえるな」
今言ったのは音のことだった。

「それはだ。聴こえるな」

「ええ、よく」

はつきりと答えた本郷だった。

「聴こえますよ。今でも」

「その通りですね」

そしてそれはアンジェレッタも同じであった。

「実によく聴こえます」

「そしてそこに何かがあるんですね」

本郷はあらためて役に問うた。

「こうしている間にも蝶達が迫りますけれど」

「あの蝶達だが」

ここで役はさらに言ってみせた。

「その身に触れるだけでなく燐粉に僅かに触れてもだ」

「やばいっていうんですね」

「そうだ」

このことも話すのだった。

「だからだ。気をつけることだ」

「そうですか。じゃあ結界も」

「通じない」

それも駄目だというのだ。

「だからだ。生き残りたければだ」

「あいつを倒す」

本郷の言葉が強いものになった。

「そういうことですね」

「そしてハープだ」

ここでまたハープのことを話しに出す役だった。

「その音がする方にだ」

「ええ、そちらに」

「手裏剣を投げるのだ」

「手裏剣をですか」

「私も仕掛ける」

彼もまた銃を構えていた。

「そしてアンジェレッタさんも」

「はい」

「御願います」

こう彼女にも声をかけた。そうしてであった。

本郷は手裏剣を、役は銃弾を、そしてアンジェレッタは光をそれぞれ出してそのハープの音がする方向に放ったのだった。三つの攻撃がそれぞれ向かう。

そしてそれが炸裂するとだった。ハープの音色が止まった。

第二十二章

そのうえでだ。澄んだ呻き声が聞こえてきたのだった。

「うう……」

「やはりな」

役はその呻き声を聞いて言った。

「思った通りだったな」

「わかったというのね」

「そうだ、わかっていた」

「そうだと返すのだった。」

「既にだ」

「既になのね」

「貴様には結界がある」

最初の戦いでのことだ。銀の銃弾や手裏剣を全て弾いたそれをだ。

「そしてそれを壊すことはできない」

「それもわかったのね」

「しかしだ。ハープを鳴らし霧を出し全てを消す時にはだ」

「そうよ」

美女の方から認めてきた言葉だった。

「その通りよ。それは消えるわ」

「その通りだな。力をそこに集中させる為だ」

「全てわかっていたのね」

「言ったな。戦いに勝つにはだ」

役はまたこのことを話すのだった。

「相手を知ることだ」

「私をということね」

「その通りだ。貴様のことはわかった」

役は断言さえしてみせた。

「糸は身体の一部で結界は霧を出す時に消える」

「全てが」

「そして貴様は霧を出す時ハープを鳴らす」

そのアイリッシュハープをである。

「そこから離れることはできない」

「それを全てわかつてのことだったのね」

「わかっていなければ死んでいた」

これは断言だった。

「貴様ではなく私達がだ」

「貴方達がね」

「しかしわかった。だから勝った」

「そういうことね」

「わかったな。それではだ」

ここまで言っただ。美女に告げた言葉だ。

「さらばだ」

「そうね。私はもうね」

霧は今も晴れてきていた。美女は胸から血を流していた。そこには手裏剣も刺さっている。言うまでもなく本郷の手裏剣である。

「終わりだから」

「そうだ。ではな」

「死ぬ時は静かに去るもの」

美女の姿が透けてきていた。そうして。

「さようなら」

最後にこう言って消えるのだった。後に残ったのはそのハープだけだった。

本郷はそのハープを見ながらだ。静かに言うのだった。

「これですけれど」

「ハープが」

「どうなんですかね、これ」

ハープの方に歩み寄りながら役に問うのだった。

「あの妖精の本体なんですかね」

「そうだろうな。それがな」

「じゃあこいつも」

「いえ、待って下さい」

しかしここでアンジェレッタが言ってきた。

「それは」

「あれっ、何か用件が」

「あります」

こう本郷に言うのだった。

「ですから」

「という何が」

「これはこちらで保管させてもらいますか」

「そのハープを？」

「ある筋からの要望でして」

微笑んでの言葉であった。

「ですから」

「ああ、あそこですね」

本郷は彼女の言葉を聞いてだ。その『ある筋』というのが何処なのかすぐにわかったのである。それは彼女の国では政府以上の権威であった。

第二十三章

「バチカンですか」

「はい、あちらから要望がありました」

「このハープを保管してですね」

「そうしていいでしょうか」

「役さん」

本郷はここで役に顔を向けて問うた。

「どうですかね」

「いいのではないのか？」

役も話を聞いて静かに述べた。

「あそこならこうしたものの保管もだ」

「お手のものですしね」

「バチカンはそうしたことは得意ですからね」

また言う本郷だった。

「それじゃあ」

「警部にも話しておくか」

「それはすぐに済みます」

アンジェレッタは微笑んでそれは問題ないというのだ。

「ここはアイルランドですから」

「そうですね。アイルランドでしたら」

役もそれで話がわかった。アイルランドはカトリックの国である。

だからバチカンの影響はかなり大きくバチカンの要望もかなりの力があるのだ。

「問題ないかと」

「ではそういうことで」

「呪われてませんかね」

本郷は話が一旦整ったところでこのことを気にかけた。

「何があってもおかしくない代物ですけど」

「まずはこうしてです」

ここでまた水晶を出してであった。そこから光を出してだ。その光の球体を作ってハープを中に包んだ。それはすぐに小さくなり水晶の中に入り込んでしまった。それで終わりであった。

「保管しますので」

「凄い魔術ですね」

本郷はそれを見て少し驚きの声を出した。

「そんな魔術が使えるのですか」

「はい。これが私の魔術です」

また言うのだった。

「ですから」

「よし、それじゃあこれで話は終わりですね」

「そうですね」

「全ては終わった」

役も言った。

「それではな」

「はい。それでこれからどうします?」

本郷は役に顔を向けて問うた。

「これからですけれど」

「仕事も終わったからな」

「何か飲みに行きますか?」

「パブか」

「はい、パブに」

またであった。とにかくアイルランドといえばパブだった。まさにアイルランドそのものと言ってもいい程のものがそこには内在されていた。

「行きますか」

「そうだな。それもいいな」

役も本郷のその言葉に頷いた。

「ここに来てからそこばかりだな」

「よし、それじゃあ」

そうしてだった。そこに来てだった。

「行きますか」

「ああ、それではな」

「アンジェレッタさんはどうしますか？」

本郷はアンジェレッタにも問うた。

「それで」

「はい、では昨日と同じく」

「いいんですね」

「アイルランドのビールはいいものですね」

こう言って微笑む彼女だった。

「それでは」

「はい、では三人で」

その足でパブに向かう三人だった。戦いの後の美酒を心ゆくまで楽しむのだった。

そして次の日の朝。警部に対して全てを報告するのだった。

第二十四章

報告を聞いた警部は。まずは静かに瞑目しそれから言うのだった。

「有り難うございます」

「はい」

「これで全ては終わりました」

「ハープですか」

警部はそのハープのことも言った。

「それがなのですね」

「そうです。ハープがです」

「ハープの精ですか」

彼はこう表現した。あの美女のことを。

「つまりは」

「ハープが死の妖精になったというのでしょうか」

これは役の想定である。

「そういうことです」

「左様ですか。不可解な話でしたね」

「月並な言葉ですが」

今度はこう述べた役だった。

「世の中は不可解なことに満ちています」

「それはその通りですね」

「だからです」

これが今の彼の言葉だった。

「それでこうしたことでもです」

「妖精とは不可解なものですね」

警部は役の話を聞きながら述べた。

「全く以って」

「それで私達の仕事となるのです」

「わかりました」

ここまで話を聞いてであった。警部ははつきりとした顔になって頷いた。

「それでは」

「はい、ではこれで」

「それでこれからどうされますか？」

警部はあらためて三人に問うた。

「すぐに祖国に帰られますか？」

「はい、そうさせてもらいます」

「我々は」

本郷と役はこう答えたのだった。

「全ては終わりましたから」

「日本でまた別の仕事に」

「そうですね。そしてアンジェレッタさんはバチカンにですね」

「住んでいる場所がローマですから」

こう述べた彼女だった。

「ですから」

「すぐですか」

「ローマに着いたらすぐにその足でバチカンに向かいます」

「わかりました。では貴女もですね」

「はい、それでは」

「わかりました。では縁がありましたら」

警部は三人の言葉を聞いてだった。静かに述べた。

「御会いしましょう」

「はい、それじゃあ」

「また」

「今度はですが」

三人は警部の言葉に応えてそれぞれ彼に返した。

「仕事とは関係なくです」

「観光か何かで話をしたいものですね」

「確かに」

そんな話をするのだった。仕事とは別にだというのだ。

そしてである。それぞれ別れを告げてだ。空港に向かうのだった。

「仕事が終わればすぐにまた別の仕事ですね」

「それが世の中だ」

今その日本に向かう旅客機に向かいながらだ。役は本郷のその言葉に応えて述べた。

「そういうものだ」

「生きている限り仕事をしろってことですか」

「そういうことだ。そしてその仕事があるからこそ」

「飯が食えるってわけですね」

「わかったら行こう」

こう述べてであった。

「いいな、それで」

「はい、それじゃあ」

こうして話をしてからその旅客機に乗り込む。アイルランドでの戦いを終えた二人はアンジェレッタとも別れて日本に戻る。あらたな戦いにだ。

ハープ 完

2010・2・20

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7443/>

ハーブ

2010年10月8日14時44分発行